

第十回 博望坡はくぼうはにて軍師初めて兵を用う、趙子龍ちようしりゆう単騎しゆ主を救う

—— 趙雲ちよううんの大活躍 ——

(前回から今回まで)

劉備は晴れて諸葛亮を軍師として迎えることができました。今回は、諸葛亮が軍師として初登板する「博望坡はくぼうはの戦い」です。その前に、前回の「三顧さんこの礼れい」での張飛の役回りが面白いので、見ておきたいと思います。

張飛は文句をいいながらも、劉備に叱られてついていきます。張飛の愛嬌あいきようのある無茶ぶりほしだいにエスカレートします。

三回目では、諸葛亮を麻縄あまなわでしよつ引いて来るといきまいて、おまえはついて来るなど劉備に叱りつけられると、置いてきぼりはいやだと言ってついていきます。

また、途中出会った諸葛均がなぜ家まで案内しないんだと腹を立てて、また劉備にたしなめられます。最後は、諸葛亮が昼寝をしているのをみて、家の裏にまわって火をつけてやるといきまいて、関羽になだめられます。

という具合で、怒りをぶちまけながらも、なかなか愛嬌あいきようのある張飛です。

暴走しかけますがその都度、劉備と関羽にブレーキをかけられて思いとどまります。しかし、劉備と関羽がいないときはブレーキがききません。

第一回では、酒を飲んだいきおいで督郵とくゆうを半殺しにしたり、ここでは取り上げませんでしたが、袁術えんじゆつとの戦いに出陣する劉備から留守をまかさされ、酒は飲まないと約束したその口で酒を飲んで大失敗をし、呂布りふに徐州じょしゅうをとられてしまふなど懲こりない暴走男張飛が描かれます。劉備集団の魅力は、思いやりの人・劉備、沈着冷静ちんちゃくけいせいな関羽、乱暴だがどこか愛嬌あいきょうのある張飛と、三者三様の個性が一体になつて話が展開していくところにあります。三人が同じような個性であれば、おもしろくもなんともなかったでしょう。

では、史実の張飛はどうだったのでしょうか。

陳寿ちんじゆの張飛に対する評は、張飛は国士こくしと呼ぶにふさわしい気風を備えていたが、乱暴で部下に恩愛おんあいをかける配慮はいりょが無く、これらの短所あたが仇あだとなつて、あえ無く最期さいごを遂げることとなつたと記しるしています。実際の張飛も乱暴な人でした。しかし、酒を飲んだという記述はありません。

(本文)

さて、劉備は諸葛亮を得てからというもの、師に対する礼をもつて対していたが、関羽と張飛はそれがおもしろくない。

「孔明は若造だ。どれほどの才能があるというのか。兄貴はあまりにも大事にしすぎだ。それにやつのはんとうの力もまだ見ていないじゃないか」と言うとき、劉備は言った。

「私が孔明を得たのは魚が水を得たようなものだ。おまえたちが、とやかく言うことではない」

関羽と張飛は劉備に言われて、黙って引き下がった。

こうしていると、曹操が夏侯惇かこうとんに十万の軍勢を率いさせ、新野しんやめざして攻め寄せて来たとの知らせが入った。

これを聞いた張飛は関羽に言った。

「ひとつ孔明にやらせてみようじゃないか」

話し合っていると、劉備が二人を呼び入れて言った。

「夏侯惇が軍勢を率いて攻めて来た。どのように迎え撃てばよいだろうか」

「兄貴、例の『水』とやらに行かせればよいではないか」と張飛。

「知恵は孔明が頼みだが、武勇は二人が頼りだ。どうして孔明に押しつけるのか」と劉備。

関羽と張飛が退出すると、劉備は諸葛亮を呼んで相談した。

諸葛亮は言った。

「関羽と張飛の二人が、私の指示に従わないことが心配です。私に指揮をさせようとされるなら、劍と印をお貸しください」

劉備がすぐさま劍と印を渡すと、諸葛亮は、指示を与えるため諸將を集めた。

張飛は関羽に言った。

「ひとまず言うことを聞いて、お手並み拝見といこうじゃないか」

(解説)

「水魚すいぎょの交わり」

みっげつ

劉備と諸葛亮（孔明）の蜜月ぶりに、関羽・張飛は面白くありません。劉備は、私にとつて孔明がいるのは、魚に水があるようなものだと言説した。

曹操軍が攻めてくると、張飛は劉備に、『水』（孔明のこと）に行かせればいいと皮肉を言います。さあ、諸葛亮のお手並み拝見というところです。

しかし諸葛亮には不安がありました。

それは、いかに万全の準備を整えても、関羽や張飛が命令を守らないなら、すべてが無駄になります。諸葛亮は、劉備から劍と総指揮官の印綬いんじゆを借り受けます。これで諸葛亮は、劉備と同じ権限を持つのです。

諸葛亮は関羽・張飛・趙雲らに、それぞれ火攻めの指示をします。関羽が諸葛亮に、あなたは何をするのかと聞くと、諸葛亮はこの城を守ると言ったので、張飛は、それはのんきな話だと笑い飛ばします。

関羽は、かたをつけるのは、計略があたるか見てからでも遅くない、と言って出て行きます。諸葛亮は、祝宴しゆくえんの準備をしてお待ちしましょうと自信満々です。

博望坡の戦い

荊州の博望坡はくぼうはで夏侯惇かこうてんと劉備の間に起きた、実際にあつた戦いです。『三国志演義』はフイクションを加えて、諸葛亮の初の采配さいはいぶりを描きます。

『三国志』には、劉表は、劉備に夏侯惇を博望の地で防がせたが、劉備は伏兵ふくへいを設けてわざと陣営を焼き捨てて逃走した。これは敵を誘うための陽動やうどうで、夏侯惇らは追撃して撃破されたとあります。

『三国志演義』では、諸葛亮は、主戦場を博望坡という険しい山あいを選びました。ここは細い山道で、諸葛亮は曹操軍をここに誘い込んで火攻めにしようとしたのです。諸葛亮の作戦は見事に凶に当り、夏侯惇は火の海のなかで大敗北を喫します。関羽と張飛は諸葛亮の采配を目の当たりすると、それまでの態度を改めて諸葛亮に心服します。

ところがこのとき、流浪の劉備を招き入れてくれた劉表が病死します。劉表の死によって『三国志演義』の世界は、新たな局面へと入っていきます。

このとき、北中国を制覇した曹操が、みずから大軍を率いて荊州へ侵攻を開始します。そのとき、荊州の支配者劉表は病死し、後妻の蔡夫人が産んだ二男の劉琮が後を継ぎます。

長男の劉琦は、諸葛亮の助言を得て江夏に移り、後継者争いの渦中から身をかわしています。劉琮は、曹操の進撃に恐れをなして降伏します。いっぽう取り残された劉備は曹操の追撃を逃れ、劉備を慕う住民を引き連れて江陵をめざして撤退します。

しかし、劉備は多数の住民を引き連れて移動したので、急追する曹操軍に追いつかれてしまい、凄まじい激戦となります（「長坂の戦い」）。このとき、趙雲がまだ赤ん坊の劉禪を懐に抱いて血路を開き、張飛は長坂橋で大喝一声して曹操軍をくい止めるなど、猛將たちの大奮戦で劉備は絶対絶命の危機から脱します。

(本文抄)

(劉備は)そこで人々を引き連れ、襄陽じょうようから江陵へ向かった。襄陽の住民の多くも城を逃げ出し、劉備のあとにしたがった。

さて、劉備に同行した兵士と住民は十万人以上にのぼった。車は大小あわせて数千輛りょう、荷物をかついで歩く者は数知れない。途中、劉表の墓のそばを通りかかったので、劉備は諸將を率いて墓前で手をあわせ、慟哭とうこくしながら祈った。

「不肖ふしょうな私は、兄上から託された重任じゅうにんを、果たすことができませんでした。罪はひとえに私一人にあり、住民たちにはありません。どうか兄上よ、住民たちお救いください」

その言葉は哀切あいせつを極め、兵士も住民もみな涙を流した。

突然、「曹操の大軍はすでに樊城はんじょうに到着し、船や筏いかだを集めておりますから、まもなく川を渡つて来るでしょう」と報告が入った。

大将たちは口々に言った。

「江陵かうりょうは要害ようがいの地であり、守りぬくことができます。しかし今、数万の住民を引き連れ、一日に十里余りしか前進できません。これでは、いつになったら江陵に着けるかわかりません。

ここはいったん足手まといの住民を見棄て、先に行くのがよろしいでしょう」

劉備は涙ながらに言った。

「大事を行おうとする者は、必ず人々を基とする。今、人々は私を頼りにしているのだ。どうして見棄てられようか」

人々は劉備のこの言葉を聞くと、みな胸うたれ感激したのだった。

(解説)

曹操軍が迫るなか、劉備は途中劉表の墓に詣で、涙ながらに別れを告げます。これまでおよそ七年にわたって自分を庇護してくれた劉表に、最後の感謝を捧げます。一刻を争う情勢の中、劉備の思いが伝わる行動ですが、このことは『三国志』の注にも記されています。

また、劉備を慕うの住民も続々と集まり、総勢十万人以上になっていました。年寄りもいれば子供もいたでしょう。これでは、一日にわずかの距離しか移動できません。

「いったん人々を棄てて、江陵にいきましよう」との声に、劉備は、慕ってきた人々を見捨てるわけにはいかないと言います。これが劉備という人物でした。中心者の姿勢は全体に影響します。劉備がかずかずの困難を乗り越えられたのは、この心があったからでしょう。

いっぼう、曹操は、劉備が先に江陵に入つては面倒と、五千の精銳をよりすぐって急追し、
とうよう ちようはんきよう
当陽の長坂橋で劉備たちに追いつきました。劉備はさんざんに打ち破られてしまします。
そこへ、趙雲が裏切つて寝返つたという者が。しかし、劉備の趙雲に対する絶対の信頼は揺
らぎません。劉備は、「趙雲の心は鉄や石のように堅い。富貴に目がくらむ男ではない」と
叱りつけます。

ちようよく
趙翼は、劉備集団の特質を「性情を以て相ひ契る（『二十二史劄記』）」といたしました。
劉備主従の信頼関係を描く名場面です。では、趙雲は一体何をしていたのでしようか。以下、
少し長くなりますが、趙雲の大活躍をお読みください。

（本文抄）

かたや、趙雲は四更（午前一時から午前三時の間）ごろから曹操軍と戦い、馳せまわつて
いたが、明け方になると劉備の姿を見失い、劉備の家族ともはぐれてしまった。

趙雲は思案した。

「殿は甘・糜の二夫人と阿斗さまを私に託されたにもかかわらず、今、軍中で見失なつてし
まった。とても殿に会わせる顔がない。命がけで、ご夫人がたと若殿の行方を突き止めねば」

左右を見ると、つき従うのはわずか三、四十騎にすぎない。

趙雲は馬を躍おどらせて乱軍のなかに突入すると、二県（新野県と樊はん県）の住民の泣き叫ぶ声が天を震わせ地を揺るがし、矢に当たり鎗やりで突かれて、逃げ惑まどう者は数え切れなかった。

趙雲が馬を走らせていると、ふと草むらに横たわっている者が目に入った。見れば、簡雍かんようである。

趙雲は慌ててたずねた。

「ご夫人がたを見かけなかったか」

「ご夫人がたは車を棄て、阿斗さまを抱いて逃げて行かれた。私は馬を飛ばしあとを追ったが、坂を曲がったとき、敵將に鎗で一突きされて馬から転がり落ち、馬は敵に奪われてしまった。この傷ではかなわず、ここに横たわっているのだ」

趙雲は從卒じゅうそつから馬を一頭借り受け、これに簡雍を乗せて先へ行かせることにし、「私は天に昇り地に潜っても、ご夫人がたと若殿を捜し出します。もし捜し出せなければ、戦場の土となるばかりです」と劉備に伝えるよう頼んだ。

言いいわるや、馬を飛ばして長坂坡ちやうはんの方へ向かった。

と、横から「趙將軍、どこへ行かれるのですか」

趙雲は馬をとめてたずねた。

「おまえは誰だ」

「私は劉使君の奥方の警護をつとめていた者です。ここで矢に当たつて倒れたのです」

趙雲が二夫人の行方をたずねると、

「つい先ほど、甘夫人は髪をふり乱し裸足で、南の方へ逃げて行かれました」

これを聞くや、趙雲は、慌てて馬を飛ばし、南の方へ追いかけて行つた。数百人の男女の住民が、たがいに手を引き合つて逃げているのが見えたので、趙雲は大声で叫んだ。

「そこに甘夫人はおいでか」

うしろで歩いてきた甘夫人は、趙雲の姿を見て声をあげて泣きくずれた。

趙雲は馬を下り鎗を地面に突き刺して、泣きながら言つた。

「ご夫人を見失つたのは私の罪です。糜夫人と若殿はどこにおいでですか」

「糜夫人といっしょに乗物を棄て、住民のなかに紛れ込んで歩いてくる途中、一隊の軍馬に蹴散らされてしまいました。糜夫人と阿斗はどこへ行ったかわからず、わたくしは一人でここまで逃げのびたのです」と甘夫人。

言葉をおぼしている最中、住民の絶叫が聞こえ、一隊の軍勢が突撃して来た。

趙雲は鎗を抜いて馬に乗り、目をやれば、馬の背に縛りつけられている者がおり、これぞ糜竺であった。背後の大將は手に大刀を持ち、千人余りの軍勢を率いている。曹仁の部將の淳于導が、糜竺を捕まえて護送しようとしていたのだ。

趙雲は大声で一喝するや、鎗をかまえ馬を飛ばして、ただちに淳于導に攻めかかった。淳于導は防ぎきれず、趙雲の鎗の一突きで馬から転がり落ちた。趙雲は糜竺を救出し、二頭の馬を奪い取ると、甘夫人を馬に乗せ、血路を開いて、まっすぐ長坂坡まで送りとどけた。

ふと見れば、張飛が橋の上で矛を横たえ馬を立てて、大声で叫んでいるではないか。

「子龍、おまえはどうして兄貴を裏切ったのか」

「私はご夫人がたや若殿とはぐれてしまったので、遅くなったのだ。どうして裏切ったなどと言うのか」と趙雲。

「もし簡雍から先に知らせがなければ、ここで会ったが百年目、とつくに命をもらっていたところだ」と張飛。

「殿はどこにおいでだ」と趙雲。

「このすぐ先だ」と張飛。

「糜子仲（糜竺の字）どの、甘夫人をお守りして先に行ってくれ。私は糜夫人と若殿を捜し

に行くから」と趙雲は糜竺に言うのと、もと来た道をもどって行つた。

馬を走らせていると、一人の大將が手に鎗やりをひっさげ、背に一振りの劍を負い、十数騎を率いながら、馬を飛ばしてやつて来た。趙雲は言葉もかわさず、ただちにその大將に攻めかかり、馬を馳はせちがわすや、その大將を鎗の一突きで打ち倒した。從騎はみな逃げて行つた。

なんとその大將は曹操の側近くに仕える將、夏侯恩であつた。曹操は二振りの宝劍を所有していた。一振りは「倚天きてん」、もう一振りは「青釭せいこう」といい、倚天の劍は曹操自身が持ち、青釭の劍は夏侯恩に持たせていた。青釭の劍は鉄を切ることに泥のごとく、たぐいなき切れ味である。

趙雲は劍の柄つかに金で「青釭」と象眼ぞうがんされているのを見てはじめて、それが宝劍であることを知つた。そこでこの劍をたばさみ、鎗をひっさげて、ふたたび重圍じゅうゐのなかへ突つ込んで行つた。

ふりかえつてみると、配下の從騎はすでに一人もいなかったが、趙雲は引き返そうとは思わず、ひたすら捜しまわり、住民に出会うたびに、糜夫人の行方をたずねた。

と、ふいに一人の者が指をさして、

「夫人はお子さまを抱いておいででしたが、左のものもやりで突かれ、歩けなくなられたの

で、あそこの崩れた土塀どべいのかけに座っていらっしやいます」

これを聞いて、趙雲が慌てて駆けつけたところ、火に焼かれた民家の土塀で、糜夫人が阿斗を抱いて、塀の下の枯れ井戸の側で泣いていた。

趙雲が馬から下りて地面に平伏すると、糜夫人は言った。

「將軍にお会いできて、阿斗は命拾いのちひらみいいたしました。どうか將軍には、この子の父親が半生、放浪したあげく、ただ一人もうけたこの子を哀れと思ってください。この子を守ってください、わたくしは死んでも思い残すことはありません」

「夫人が災難にあわれたのは、私の責任です。何もおっしゃらず、どうか馬にお乗りください。私は歩いて死にももの狂いで戦い、夫人をお救いいたしますから」と趙雲。

「それはいいけません。將軍が馬なしではいいけません。この子だけをお願いいたします。わたくしは深手ふかてをうけていますから、死んでも悔いはありません。どうか將軍には、早くこの子を抱いて先へ進んでください。わたくしのことは気にかけないで」と糜夫人。

「関とぎの声が近づいています。追っ手が迫っていますから、夫人には早く馬にお乗りください」と趙雲。

「わたくしはもはやこれまでです。わたくしを棄てていってください」と言いながら、糜夫

人は阿斗を趙雲に差し出し、「この子の命はすべて將軍におまかせいたします」と言った。

趙雲は再三再四、馬に乗るよう頼んだが、糜夫人はどうしても乗ろうとしない。

四方からまた鬨の声があがったので、趙雲は声をあげまして言った。

「夫人が私の言うことをお聞き入れにならず、追っ手がここまで来たら、もうどうしようもありませんぞ」

すると、糜夫人は阿斗をそこに残して、身をひるがえして枯れ井戸に飛び込んでしまった。

趙雲は糜夫人が亡くなったのを見て、曹操軍に屍しかばねを奪われるのを恐れ、すぐさま土塀どせいを押し倒して、枯れ井戸をおおい隠した。隠しおわると鎧よろいの帯をほどき、阿斗を懷に抱きかかえ、鎗をつかみとって馬に乗った。

そこへ、早くも一人の大将が現れた。これぞ曹洪の部将の晏明あんめいで、三つ又のもろ刃の剣を手に、趙雲に戦いを挑んで来た。しかし、三合も戦わないうちに、趙雲はこれを鎗の一突きで刺し殺し、兵士どもを蹴散らして血路を開いた。

馬を走らせていると、前方からまたも一手の軍勢に行く手をさえぎられた。先頭の大將の旗さし物にははつきりと、「河間の張郃かかん ちやうこう」と大きな字で記されている。趙雲はいっさい言葉をかけず、鎗をかまえてただちに戦いを挑んだ。十余合ほど戦ったところで、趙雲は面倒めんどうと

ばかり、血路を開いて逃げ出した。うしろから張郃が追いかけて来る。

趙雲は馬を鞭うちながら逃げたが、思いがけず、馬もろとも穴に落ちてしまった。張郃が鎗をかまえて突き刺そうとしたとき、突然、一筋の赤い光が穴のなから射しのぼった。その瞬間、馬は上空めがけて跳躍し、穴の外へ飛び出した。

張郃はこれを見ると、慌てて退却した。

趙雲がなおも馬を飛ばして走っていると、突然、背後から二人の武将が大声で呼ばわった。

「趙雲、逃げるな」

前方にも二人の大將が、それぞれ武器を手に、行く手をさえぎった。うしろから追って来たのは馬延と張顛、前に立ちふさがったのは焦触と張南、いずれももと袁紹配下の降將である。趙雲が力をふるってこの四人と戦ううち、曹操軍がまわりを囲んだ。

趙雲は青釭の劍を抜いて、当るをさいわい斬りつけたが、その手の上がるところ、敵の鎧かぶとは一刀両断され、泉のように血が噴き出した。こうして大勢の敵の大將を追いはい、趙雲は包圍網を突破したのだった。

この一場の戦いで、趙雲は阿斗を懷に抱き、包圍網を突破して、敵の大旗二本をなぎ倒し、槊三本を奪い取り、鎗で突き、劍で刺し殺した曹操軍の名のある將は、五十人余りにのぼ

た。

趙雲は重圍を突破して逃れ出たが、その戦袍せんぼうは返り血に染まっていた。馬を走らせていると、坂の下からまた二手の軍勢が攻め寄せて来た。これぞ夏侯惇の部将の鍾繻しょうしん・鍾紳しょうしんの兄弟。一人は大斧おおまさかり、もう一人は画戟がげきの使い手だった。二人は大声で怒鳴った。

「趙雲、さっさと馬を下りて、縛ばくにつけ」

趙雲が鎗をかまえて突き出すと、鍾繻が先に立って迎え撃った。両馬馳せちがい、三合も戦わないうちに、趙雲の鎗の一突きで鍾繻は馬から転がり落ち、趙雲は血路を開いて逃げ出した。

背後から鍾紳が画戟がげきを手に迫いすがり、馬のしっぽに触れるところまで近づいたとき、趙雲の鎧の背に画戟の影がさした。この時、趙雲が馬首をめぐらすと、二人の胸と胸はぶつからんばかり。趙雲は左手に鎗を持つて画戟を受け止めながら、右手で青釭の剣を抜き放ち、かぶとから頭まで真っ二つに切り下げると、鍾紳は馬から転がり落ちて息絶え、残りの軍勢も逃げ散った。

危機を脱した趙雲が長坂橋めざして馬を走らせていると、背後から関の声が響いて来た。なんと文聘ぶんべいが軍勢を率いて追って来たのだ。趙雲が長坂橋のたもとまでたどり着いたときに

は、人も馬も疲れはて、戦う気力もなかった。

と、張飛が橋の上で矛をかまえている姿が目に入ったので、趙雲は大声で呼びかけた。

「翼徳、助けてくれ」

「子龍（趙雲の字）、早く行け。追っ手はわしが防ぐから」と張飛。

趙雲は馬を飛ばして橋を渡り、二十里余り進んだとき、劉備が樹の下で休息しているのを見つけた。趙雲は馬を下りると、ひれ伏して泣き、劉備もまた泣いた。

趙雲は息をきらせながら言った。

「私の罪は、死んでも償いきれません。糜夫人は深手を負われて、どうしても馬に乗ろうとなさらず、井戸に身を投げてお亡くなりになりました。私はやむなく土塀を倒して井戸をおおい隠し、懐に若殿をお抱きして、幾重もの囲みを突き破り、殿の大いなるご威光のおかげで、幸い帰つてくることができました。さきほどまで、若殿は泣いておられましたか、今は身動きもなさいません。どうなされたのか」

かくて懐を開いてのぞきこんだところ、なんと阿斗はぐつすりとお眠っており、目覚めるようすもない。

趙雲は喜び、「ありがたや、若殿はご無事であったか」と言いながら、両手で捧げながら

劉備に差し出した。

劉備は受け取るなり、阿斗を地面に投げつけて、

「この小僧め、おまえのために、あやうく私の大事な大将を失うところだった」

趙雲は慌てて阿斗を抱き上げ、泣きながら言った。

「私は、命を棄てても、このご恩に報いることはできません」

(解説)

長くなりましたが、このように『三国志演義』は、ほれぼれするような趙雲の大活躍を描きます。

『三国志』趙雲伝では、「曹操が当陽県の長坂で劉備に追いつくと、劉備は妻子を棄てて南方へ逃走した。趙雲が阿斗（後の劉禪）と甘夫人を保護した。おかげでどちらも危難を免れることができた」と記し、また注に引く「趙雲別伝」ちやううんべつでんでは、「劉備が敗北した時、趙雲がもはや北方に去ったという者があった。劉備は手戟しゅげきでその者を打ち、趙雲はわしを見棄てて逃げたりはしないとあったが、ほどなく趙雲が到着した」とあるだけで、この二つの短い記述から、『三国志演義』は、趙雲が曹操軍のなかを単騎で駆け抜ける壮大な名場面をつくり

あげます。

またこの時、趙雲は曹操の部将夏侯恩から「青紅」という宝剣を手に入れます。曹操が作らせた青白い光を放つ神秘的な剣で、以後「青釭」は趙雲の愛剣となります。

最後の、劉備が阿斗（劉禪）を地面に投げつけて、「おまえのために、あやうく私の大事な大将を失うところだった」というのは、さすがに演出過剰かじょうの感があります。『三国志』にそんな記述はありません。